

2018 年度成果の説明書

(氏名) 大島 登志彦	(学部) 経済学部
<p>1 重要事項 「・」で関連調査の出張日と内容を記す。 公表された具体的研究成果物(論文・講演・監修資料等)を○番号で記す。</p> <p>[I]「伊勢崎市における公共交通現況調査業務」(同市からの委託研究) 大島と伊勢崎市が連携して、(1)「あおぞら」バス(伊勢崎市のコミュニティバス)利用者(乗客約 150 人)、(2)無作為抽出で市民計 1000 人、(3)福祉施設利用者 を対象とした 3 種類のアンケート調査を行い、その集計結果を分析した。あわせて、平常の見聞調査や諸交通機関などの運行情報を踏まえて、年度末に報告書①をまとめ、同市の公共交通の現況調査と利用促進に向けた提言を執筆した。</p> <p>①「伊勢崎市公共交通現況調査業務 調査報告書」 (27 頁、2019 年 3 月高崎経済大学 大島登志彦研究室作成)</p> <p>アンケート結果から分析された特記すべく現況や主要要望事項は、以下の通りである。</p> <p>[1]高校生の通学利用の多い 2 路線の混雑事情と朝の増発及び夕刻の適正時刻の運行の要望及びバスの利便性の向上(乗り切れないことがある、増発、接続改善等)</p> <p>[2]タクシー利用者は人口・都市規模の割に些少</p> <p>[3]埼玉・東京方面への足：埼玉県の前まで自家用車でアクセスして、鉄道利用が主流(高速バスや最寄り駅から東武鉄道、高崎経由 JR の利用者は少なかった)</p> <p>[4]一般路線バスや鉄道も含めた分かり易いバスの運行と情報提供</p> <p>上記を受けて、筆者は報告書の中で、バスは現況規模を前提として利便向上施策として、次の改善提案を行なった。</p> <p>[1]朝の通学時間帯に高校生が多数利用する 2 路線を朝夕増便する(増車等しないで、他の路線を運行するバスの空時分等を有効活用した素案を具体的に提示)</p> <p>[2]タクシーをデマンド交通や福祉交通として市が助成しながら存続・活性化を図る</p> <p>[3]鉄道や一般路線バス・周辺市の自治体バスとの接続や運行連携を強化して効率的運行</p> <p>[4]運行日区分の見直し：月～金曜(祝日を含む)と土日曜→平日と土休日</p> <p>[5]容易に乗り入れ可能な近接市域への路線延長</p> <ul style="list-style-type: none"> ・赤堀シャトルを桐生市内の新里・新川駅まで、 ・南部シャトル等を本庄市上仁手地区まで <p>以下この研究に関わるフィールド調査を行った主要な出張は以下の通り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 6 月 21～23 日：山形県央置賜・最上の山間地域のバス事情 ・ 1 月 25 日：一関・栗原市及び宮城県庁等での交通調査と資料収集 ・ 2 月 17～20 日：鳥取・松江・出雲市内のバス事情及び若桜鉄道・一畑電車の実態調査 ・ 2 月 27～3 月 2 日：南伊勢・松阪・甲賀市町内などのバス事情の調査 ・ 3 月 10 日：盛岡・石巻市内の震災復興交通事情の変容などの調査 <p>[II]「博物館や遺産にみる蚕糸絹技術・文化の地域的特性とその伝承に向けた研究」 (大学院経済研究科博士校旗過程在学の吉田豊と共同研究による研究奨励費) 昨年度の「群馬の産業遺産の多角的考察と活性化に向けた研究」に続く研究として、</p>	

蚕糸絹関係の自営業をこなして造詣も深い院生の吉田君の支援・協力で研究を進めて、次の成果物を作成した。

②「博物館や遺産にみる蚕糸絹技術・文化の地域的特性とその伝承 調査報告書」

(17頁、2019年3月 高崎経済大学 大島登志彦研究室作成)

全国の蚕糸絹関係博物館等(該当すると思われる館がない地域は総合博物館)189館へ表題に関わる質問票を送付し、その回答を調査分析した(104館より返答)。調査事項の性格が捉え難いことや、記述方式の質問事項を多くしたため、方向性や結論は導けず、回答事例や記述を紹介することが主となったが、表題に関して、人と財源が不足していて十分な活動ができない傾向にあることは痛感された。また、現在の担当職員は、蚕糸を周知・経験してきたが、次世代に担当者が変わると、保存・展示・説明自体に支障が生じて、技術・文化の伝承は困難になることに対する懸念が考察された。

この研究に関わる主な出張調査は以下の通り

- ・10月26～27日：新潟・佐渡への蚕糸・鉱業・交通遺産等の見学調査(吉田豊君と同行)
- ・12月9日：長野・上田市への蚕糸関係の博物館等見学と資料収集
- ・3月11～12日：山形県内の蚕糸・鉄道遺産等の見学調査(米沢・村上・酒田・鶴岡等)
(経済学部3年関上巧君[質問票の集計・考察を協力してきた]が同行)
- ・3月13～14日：白河・大田原市の歴史遺産などを見学調査
- ・3月27～30日：九州の蚕糸業・鉱業遺産等を見学調査
(鹿児島・串木野・大牟田・山鹿・鯛生・北九州等の蚕糸・炭鉱・金山跡等)
- ・年間を通して上記の他、群馬県内・東京都内の蚕糸関係博物館等日帰り見学調査数回
これら出張における調査成果は、この研究の他⑥⑦の研究・著作にも活用

[Ⅲ] 路線バスの案内資料作成の監修業務等

③「東吾妻町の公共交通案内」(2018年4月版、A2サイズ片面カラーのチラシ)

東吾妻町については、2015年度、地域交通活性化協議会(役場企画課に事務局)が独自に「乗合バス案内」(A3)が作製された。16・17年度、大島が同協議会の委員・議長としてメンバーになる。会議のなかで、バスカード導入の必要性や吾妻高校の統合を踏まえたバス路線の再編提案等を行った。そして、16・17年度には、当「乗合バス案内」の作成に関して監修を行い、改訂・大判化(A2)し、吾妻中央高校開校に伴うダイヤ改正案と改善ポイントを提案した。18年度も引き続きこの業務を続けてきたが、19年5月改訂「乗合バス案内」(A2)の作成の監修を行ってきた(19年5月刊行予定)。

[Ⅳ] ④「列車とバスで行く群馬の旅」(B5判2/3分縦長で32頁)パンフレットの監修
(群馬県観光物産国際協会からの受託研究業務、5月～7月)

群馬県が設定した観光キャンペーン期間(7～9月)に合わせて、同協会が、公共交通を乗り継いで観光周遊して温泉に宿泊するモデルコースを紹介した当冊子の監修業務を行った。この受託研究業務は、15～17年度に続いて今回4回目で、新たなコースとして世界遺産3つを巡る奥多野コースを提案・掲載した。また、この業務の概要は、⑤「地域・社会貢献白書2018」(本学作成)に紹介した。翌19年度は、観光キャンペーン期館が4～6月になるため、19年初頭から19年度用のパンフレット作成に向けた業

務を進めている。

[V]地域課題研究「高崎市広域圏の路線バスを総括した課題解決に向けた研究」

高崎市内の路線バスの利用促進と活性化、事業者や自治体相互の連携やそのための適正な広報資料のあり方などを研究した。また、18年度までの研究に引き続いて、高崎市でも導入できそうな国内の路線バスの実態調査と資料収集のための出張を行った(下記に主要なものを記載)。また、近年地方都市でも、ICカードが普及している。その場合、全国の交通系(SUICA・PASMO等)のほか、地域独自のもの、コンビニ主導型、大型ショッピングセンター主導のものなど、様々な方式があり、それらの事例・実態調査を行って、適材適所の考察、群馬県・高崎市内で導入を進める場合の指針などを提案していくことを研究課題としてきた。以下主要な関連調査のための出張を記す。

- ・6月28～29日：青森市周辺と北上市などのバス事情
 - ・8月28日：鬼怒川・日光の観光交通
 - ・9月3～7日：北海道の鉄道・路線バス事情(函館・帯広・釧路・網走市の周辺など)
 - ・9月28～29日：野沢温泉・黒姫・中野・湯田中周辺のバス事情
 - ・3月20～23日：四国・福山のバス事情と交通遺産(四万十川流域、室戸岬周辺、福山鞆)
- これらの研究成果の一部は、①⑥⑦の著作で活用している。

[VI]通常の授業や学生指導、研究活動の中での成果

(1) 著しく貢献できた学会活動

- ・鉄道史学会：2016年9月から会長(2018年9月まで)を務める(その後は理事)
(2017年度及び18年度住田奨励賞選考委員を兼務)

- ・産業考古学会：評議員として学会運営に参画
- ・全国地理教育学会：監査として経理について助言

(2) 『交通新聞』の「交通評論」欄に連載⑥

- ・2018年5月7日「包囲されている町や村」
- ・2018年7月17日「本線より早かった支線」
- ・2018年9月25日「遠回りする鉄道旅行」
- ・2018年12月3日「人口の少ない市」
- ・2019年2月19日「鉄道と川の関わり」

(3) 日本交通政策研究会の研究プロジェクト

「公共交通サービスにおける経済理論と実務の乖離に関する基礎的研究」に参画
交通地理学・交通経済学の分野を主体とした地域公共交通研究者が集まって、毎回2～3人の研究発表を通して、各地の事例を情報交換してきた。今年度は、表題のテーマで、そのなかに次の論文を執筆した。

⑦「地方都市域の路線バスの変遷と検討課題ー群馬県内の事例を中心とした考察ー」

(上記の表題の報告者が2019年5月に発刊予定)

(4) ⑧「旧三池炭鉱専用鉄道電気機関車調査報告書」

(青木栄一・堤一郎と共著で大牟田市史別冊に計30頁分掲載、

大牟田市役所市史編さん室が2018年度作成、19年5月中に発刊予定)

三池炭鉱では、石炭の効率・大量輸送を目的に専用鉄道を敷設したが、当初から電化して、外国製電気機関車を導入した。それらは、後に国産技術に発展していく意義ある車両が多く、日本の電気機関車史上、重要な意義を有していた。その中で、廃鉱跡地に凸型電機機関車 4 両が保存展示されたが、その保存機関車を中心に、同炭坑や鉄道の歴史、日本の近代化における意義を絡めて考察した論文である。

以上、○の論著は、『』に著名・「」で論文・分担執筆題目を記載し、特記以外は単著である。講演等は「」で題目を示し月日を記載した。出張は、学内研究費と上記 1-[I]~[V]の各枠組み予算で進めたが、執行時期・残額に応じて、別予算枠の出張もある。

2 その他の事項

[I]学生・院生の学会発表や論文指導とその成果をまとめたゼミナール報告書の作製等

(1)大学院博士後期課程院生(秋葉健君・吉田豊君)の研究指導

(2 人とも 19 年度に学位取得に向けて、研究・論文執筆に取り組んでいる)

秋葉健君：鉄道の沿線人口と経営に関わる研究指導

(本学経済学会論集や群馬地理学会の学会誌へ査読論文を投稿)

吉田豊君：織物流通史関係の研究指導、大島と共同で佐渡などへフィールド調査

(シルク学会や群馬地理学会の学会誌へ査読論文を投稿)

(2)ゼミナール卒業論集「地域調査研究論集 第 17 号」の編集・発刊 (2019 年 1 月発刊)

[II]外部から委嘱された社会活動等の重要事項記載以外の主要な地域貢献業績

(1)群馬県タクシー準特定地域協議会 会長

(2)伊勢崎市コミュニティバス検討委員会 委員長

(3)東吾妻町地域公共交通活性化協議会 委員

(4)上里町地域公共交通活性化協議会 委員